

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

氏 名 メベッド シェリフ ラムシー
MEBED Sharif Ramsey

論 文 題 目

川端文学におけるフロイト思想の影響を巡る一考察
—自由連想から「不気味なもの」まで—

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	福田 真人
委員	名古屋大学	教授	涌井 隆
委員	国際日本文化研究センター	教授	坪井 秀人
委員	お茶の水女子大学	准教授	谷口 幸代

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

本論文は、川端康成（1899-1972）の文学作品の生成にオーストリアの精神分析学者ジークムント・フロイト（1856-1939）の思想がどのように関わっていたかという問題について考察したものである。その影響はテーマ的なものだけではなく、文体にも影響が及んでいるということが本論文の重要な論点の一つである。フロイトは神経症の患者に「自由連想」の手法を使い、患者に楽な姿勢をとらせ、思い浮かぶことをそのまま医者に話すように指導していた。川端はその「自由連想」を使い作品を書くべきである、とエッセイで主張していたということから本稿の論考が始まる。そして多くの作品でフロイト的なテーマが取り扱われることを巡って論考が展開されている。

ここで取り上げられる作品は川端のデビュー当時から晩年のものである。まず第一章では、川端が大学を卒業した頃に発表したエッセイにおいて、心理学への関心が高かったことが指摘されている。そして川端の関心が、心理学から精神分析に移ったことを裏付けるため、川端が二十代に書いたエッセイが取り上げられている。また、川端は作品を書く際、フロイトの自由連想の技法を用い、無意識にあることをそのまま表象しようとしていたことを論じる。そして川端がデビュー当時に書いた短編を二編取り上げ、その文体にフロイトの思想が及ぼした影響について分析し、考察する。

第二章では、短編『弱き器』（1929）について考察される。この作品は、主人公が見る夢を中心に展開し、フロイトの精神分析用語を使用して、主人公自身が作品の中で見た夢の象徴的意味を分析している。また、川端はこの短編を加えたいくつかの作品で、フロイトの『夢判断』（1900）に書かれた、夢に関する理論から複数の概念を借用していたことを指摘する。

第三章では、フロイトが文学作品や平生の生活の中に表出される《不気味》という観念を追究した論文『不気味なもの』（1919）に注目し、川端が1929年に発表した作品『死体紹介人』を分析する。この作品の分析の中で特徴的に見られる「不気味」というテーマは、フロイトの書いた《不気味》なものと同じような意味として用いられていることを指摘している。

第四章においては、『水晶幻想』と『針と霧と硝子』が取り上げられる。この二作品は、「新心理小説」と呼ばれているもので、アイルランド作家ジェイムズ・ジョイス（1882-1941）の影響が大きいと言われてきた短編である。本稿ではジョイスの影響としての「意識の流れ」だけではなく、フロイトの思想がジョイスより重要な役割を担っていることを主張する。その影響を明らかにするため、作品を分析する。

論文審査の結果の要旨

第五章では『住吉』連作と呼ばれる作品群に注目し、これらの作品に夢の分析や、フロイトの提案した「投影」という精神分析の概念が顕著に現れることが述べられる。そしてエディプス・コンプレックスもこの作品の大きなモチーフとして登場することを指摘している。本論文では、これらの精神分析的テーマが単に作品中に言葉として出現するだけではなく、作品の中心的駆動力ともなっていることも考察する。特に主人公が恋をする相手が母の代替物として描かれていることに注目し、作品の底流にフロイトの精神分析的な思想が流れているということを論じている。

第六章では、『みづうみ』(1955)を取り上げ、この作品においてエディプス・コンプレックスが大きな役割を果たしていることを指摘する。そして、川端の作品に出てくる「魔界」という空間について考察し、彼の魔界というモチーフがフロイトの思想と深い関わりがあることについて論じている。そして、フロイトの思想を通して魔界のテーマを解釈し、魔界の要素を明らかにしている。川端の魔界については、すでに多くの研究者によって考察されてきたが、精神分析的な要素を指摘したものは、これまで現れていない。本論文では、川端の作品に出てくる魔界の住民は、普通の人間のように無意識の欲望を抑圧するのではなく、むしろそれを追究するという特徴があり、加えて、性的対象に痛みなどの被害を加えようとする特徴があることを分析している。この性格は、フロイトの『性理論三篇』で紹介される人間の無意識的性生活に由来することについて論じる。つまり川端の魔界はフロイトの無意識によって構成されていると論じる。また、『みづうみ』に出てくる死んだ赤ん坊の幻想の描写を取り上げ、その赤ん坊はフロイトのエッセイ『不気味なもの』に取り上げるドッペルゲンガーと共通点があり、『みづうみ』に現れるそれぞれのイメージとテーマがフロイトの《不気味》なものに類似していることを指摘し、フロイトによる直截的な影響である可能性について考察している。

第七章では、川端の『眠れる美女』(1960)を取り上げ、この作品には多くの神話や民話の構造との類似性が認められると論じている。特に、神話に頻出する人物の原型が眠れる美女にも出現していると指摘する。この点は反復衝動とフロイトの「不気味なもの」という概念により繋がっていることについて論じる。また川端の『片腕』で現れる不気味と去勢コンプレックスという二つの問題について考察する。川端が意識的にフロイトの思想を作品に取り入れていたことについて論じる。

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

第八章では、『片腕』(1965)を取り上げ、この作品の中に見られるフェティシズムを検証しつつ、シュールレアリズムの影響を探るものである。しかもこの作品に顕著に見られる《不気味》なものは、フロイトの『不気味なもの』を熟読玩味したものの結果である事を分析している。

結論として、前の章を踏まえ、フロイトの思想が川端文学に重要な影響を与えたことを主張する。従来の研究では、その影響が表面的なものであるように評価されてきたが、本稿ではその影響が文体からテーマまで川端の文芸全体の意味体系と重要な関わりを持っていたことを指摘する。川端は日本の文化を代表する伝統的で純粋な日本的作家という定説がある。しかし本稿は、川端の作品の中心に、精神分析という極めて近代的で海外に由来する要素が存在しているとし、その前衛的な側面に注目してきた。フロイトの思想がなければ、現在の川端の文芸は存在しないと論じる。

本論文は、従来日本古典への回帰などというレッテルによって、とかく日本美を謳った作家として評価を受けることとなった川端康成の、しかし、西洋文学の素養、西洋で流行した心理学や精神分析を誰よりも早く取り入れて、自家薬籠中のものとした柔軟な作家態度を再評価するものであり、作家論としても、また作品論としても十分その学問的貢献が認められるものである。

他方、川端とフロイトの関係性を、あまりに一元的に捉えており、もっと幅広い観点からの俯瞰が必要なのでなかったか、という疑問も呈せられた。精神分析には、ユングなど多数の学派があり、また川端が作家として、あるいは心理学や精神分析の学説に依拠して作品を創造したという反面、川端自身がそれらには無関係に、すでにそうした世界観、あるいは世界像を自ら創造しえた可能性についても考える必要があると指摘された。また、表記、文章の揺れなどが別途指摘された。

ただし、これらの指摘は、論者の今後の研究によって解決されるべき課題であり、本論文の価値を些かでも損ねるものではない。以上の評価から、本審査委員会は、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達しているという判断をした。